

青春の絆

山城4回 石田 祐三郎

過ぎ去った五十余年の歳月を振り返ると、家族は無論のこと、様々な師や友人との出会いが走馬灯のように脳裏に浮かんで消え、消えては現れる。

ここに語る高校生活の一コマ一コマは、語る本人にとっては忘れえないことではあるが、相手の人々にとってはそれほど記憶に留まっていなくても知れない。したがって、話は独り善がりとも見えるが、本人の人生にとって極めて重要な要素として記憶から消えず、今日に至っている。中でも記憶に生々しく刻み込まれているのは、中学校（第一工業学校）二年の終わり頃、すなわち旧制高等学校最後の入試と合格発表のあった時期の「校庭での朝礼」である。それは、生徒会長で人望があり且つ学内の成績トップの五年生の日さんが、「私は学力が未熟なため第三高等学校の入試に失敗しました」と涙ながらに語られた。つづいて英語の四方先生が、「私の英語教育（私見：生きた英語であったが受験用ではなかった）が間違っていたから」

と語られたことである。この素晴らしい師弟の人間関係に感動すると同時に、工業学校教育と中等学校教育の違いを痛感し、このまま工業学校に居れば、父の出身大学へは入れないの思いが急に膨れあがった。自分の将来を漠然と意識したのはこの事件が切っ掛けだった。

そのころ、わが国の旧教育体制が六・三・三制の新制度として翌年から実施される事が公示された。迷わず普通科への転向希望を提出した。そこが山城高等学校（旧制第三中学校）併設中学校で、三年生の二学期だった。初めての男女共学であり、クラスには第一工業出身者は私人。問題の英語の授業では読めず答えられずの連続、もう破れかぶれだったが、意外と図太く、いま流行りの授業放棄もせずに来れたのは、多くの友人、とりわけ飯野君と上田君が授業の合間に手助けをしてくれたお陰で、忘れ得ない一コマだ。かくして中三の後半を、彼らのバックアップを得て切り抜けることができ、竹馬の友として今日まで変わらずお付き合い頂いている。

高二になると、大学受験のための模擬テストが始まり、成績が体育館に貼りだされ、格好だけは受けるものの、皆目できず欄外の連続だった。確か高二的夏休み明けに、担任の山本文二郎先生による、大学受験の有無など生徒一人ひとりに対する屋上でのヒヤリングがあった。私は先生の質問に真面目に京大を

受けますと答えた所、「ばか言え、こんな成績で受かると思ふか。今日から帰宅したら毎日六時間勉強しろ。参考書は、英語は小野圭、数学は岩切、国語は……を今日の帰り道で本屋によって買って来い」と、叱られた。この一言に今日の自分があるとの思いが強く、生涯忘れることはないだろう。私は勉強不足を当然認めながら、父の過ごした大学であるという単純な理由で、受験大学を変える気が全くなかった。かと言って、一日六時間の勉強は大変で、高三の終わりに近づくころまで受験勉強はなかなか身に付かなかった。その後も、上田君、飯野君の他、菅井君、今は亡き五味君、それに佐々君、小室君、伊藤君らにも引っ張られながら、楽しくもあり苦しくもあった長い浪人生活の末、卒業三年（三浪）後に目的を達成することができた。入学して間無しに、人伝てに、山本先生が「彼奴良く頑張ったな」と言っておられたと聞き、この不肖の生徒を良く憶えていて下さったな、と胸が熱くなったのを憶えている。

今日だったら、私は担任の先生に、京大受験を許可して貰えなかったであろうと背筋が寒くなる思いがする。いつの日か先生にお会いして、お礼を申し上げようと長年考え続けていたが、悲しいことに、お会いするより早く昨年（二〇〇四年）お亡くなりになった。グズグズして先生をお訪ねしなかったことが悔やまれ、すぐ佐藤さん（先生の奥様の友人、鳥小屋会）に案内

を請うて仏前に花を捧げた。

この話を書き終わると、肩の荷がとれたように、楽しかったの一言に尽きる高校生活の断片が頭をよぎり、そのうちのいくつかを羅列して見たくなった。

(一) 金槌

男女共学であつたが故に、内証にしていたことの一つは自分が金槌であることだった。前置きから話すと、中一頃から、兄の結成した少年軟式野球チームに属し、日の暮れまで野球三昧の日々を過ごし、京都社会人軟式野球連盟のCクラスのトーナメント試合に幾度か参戦した。そんな訳で、校内のスポーツ大会には野球は無論、ラグビー（高一の時学年優勝）やバスケットボールなどにも下手の横好きでよく参加していた。そのことをご存知の梅田昌三先生（高三担任、故人）が、水泳大会のリレーに私を推薦された。「泳げません」の一言が格好悪くて言えず、後で先生に直訴しても笑って認めていただけず、結局その日は欠席してクラスに迷惑をかけてしまったこともあった。

(二) 百薬の長

今だから言えることだが、当時は独身で京大の文学部歴史学科の研究生であつた高二担任の山本先生の下宿先（妙心寺のある塔頭）をお尋ねした時のこと。先生は、「煙草は百害あつて一利無しだが、酒は百薬の長だ」と言つて少々だったが夏の夜

を楽しませて頂き、巡洋艦で逃げた話、世界史の裏話や大学生活の話など聞かせて頂いた。

その年の暮れ、例の仲間六、七名と山本先生を招いて、白梅町の区役所裏を借りて忘年会をした。雪がちらつく中、先生には黙って一升瓶をコート^{コート}の裏に隠して五合ばかり求めて来て、「先生、酒を少し買って来ました」と言うと、「適量なら良いだろう」と言って、先生の責任において認めて頂き、楽しい忘年会を過ごした。

高二の終わりに先生は、もうここは校長の方針が規則づくめで自分には合わない、と言って朝日新聞社に移られた（後日、農政評論家として活躍された）。

（三）豚コレラ

秋の遠足では、清滝や嵐山や保津峡などを目的地とし、弁当でも、飯^ごごう炊さんでも良いという自由が認められていた。当時肉の入手が難しかったので、私が動物のワクチン製造で採血後の肉部分を仕入れて来て、前述の仲間とすき焼きで箸をつつきあった。今でも良く友達から豚コレラの肉の話が笑い草となっている（今日では食用が禁止されているが、実際には加熱すれば人畜無害である）。

（四）鳥小屋の会

中三の二学期に山城高等学校併設中学校に編入したが、我々

は旧制中学一年から中学三年、更に新制高校の一年生まで、ずっと下級生という、戦後の教育制度の狭間にいたわけだ。

教室の建物はグランドの北側に木造二階建ての建物で、野球などから窓ガラスを守るために金網が張っており、誰言うともなく「鳥小屋」と呼ばれていた、クラス分けは「ア」から「ワ」までを並べて、アイウの順にクラスに割り振られた。一組はアからウまでの約五十名である。ちなみに「井上」は八名いて、ある先生は出欠を取る際「井上八名来ているか」と省略しておられた。クラスには後に有名な映画監督になる池内君（伊丹十三、故人）がいて、壁新聞を作ったり屋根裏に書斎を作ったり、英語の先生を泣かせたりしていた。彼は事あるごとに映画監督になると言っていたが、その目的を果たし、良い作品を残して早世した。彼とは家が近かったので、二年ほど我々の野球チームに所属し、一塁を守りたがったが、練習を良くサボっていたのが印象的だった。

彼のほかに面白いキャラクターが沢山いて、笑いが絶えなかった。そんな訳で、よくクラス会をして、いつ頃からか「鳥小屋会」と名付け、二年に一回（実質、年に二、三回）集まっている。また、メールでの情報交換も盛んで、交流を深めている。

（五）同窓生との出会い

大学（農学部）に入って驚いたのは、クラスに山城の一年後

輩の小田君、三年後輩の岡本君と南君が居たこと、それに専門の水産学科では一年後輩の西出君が二年先輩にいたこと、さらに、スキー部に入ると佐々君が三年上にいたことである。なるべく浪人しないで大学へ入るに越したことはないが、浪人したことによって色々な友達が出来て楽しさが倍增するという利点もある。

(六) 京大双陵会

先輩後輩に関連してもう一件。二十年ほど前に三中・山城高卒業生の京大教員の会「京大双陵会」が発足した。構成は昭和十五年卒から三十九年卒（二名）までほぼ五十名であるが、発当初からメンバーが変わらない。すなわち、跡継ぎが無く老齢化の道を辿っていることである。これも少子化の影響か、はたまた高校教育と受験教育の食い違いか。多少心配でもある。

青春から五十年余を振り返って、常にチャンスは「周到な準備をしたものにのみ活かされる」ことを痛感したが、それを若い後輩達にも伝えたいと思うこの頃である。

著者略歴 … 平成八年、京都大学農学部退官。京都大学名誉教授。

現在 … 福山大学生命工学部海洋生物工学科教授。
専攻 … 海洋微生物学